

## 寄稿

# 私と作業科学

聖隷クリストファー大学

宮前 珠子

Tamako Miyamae

(日本作業科学研究会会長)

1990年代前半、Occupational Scienceという言葉がA J O Tに登場し、何か論争が行われているらしいと言うことは知っていたが、単発的に英語論文を読んでも全体像が理解できるわけでもなく、Occupational Scienceは、私の意識の外にあった。

夏の札幌での作業科学セミナーには第2回（1998年、なお、第1回は1995年）からかなり参加していたが、これで作業科学の全体像が分かるわけでもなく、曖昧な認識であった。

札幌医大保健医療学部長であった佐藤剛氏は1990年代後半から2000年代の初めにかけてO Tジャーナルの編集委員で、毎年、氏が企画を担当する号に原稿を頼まれるようになった。O T教育課程に関すること、O Tの大学院教育に関すること、そしてO T理論に関する論文を何回か書いた。

2000年の冬になって、その年度、札幌医大大学院保健医療学研究科の作業科学専攻学生を指導するために1年間来ておられた南カリフォルニア大学のフローレンス・クラーク博士が帰国されるに当たって、帰りに当時私がいた広島に寄って私と対談し、それをO Tジャーナルに載せるといふ企画を佐藤剛氏が提案し、実現することになった。クラーク博士には2000年2月25日夕刻、私が勤務していた広島大学医学部保健学科で講演して頂き、佐藤剛氏が通訳を担当し、学生、教員、地域のO Tなど多数が参加した。その後場所を変えて食事をしつつ補足情報を得るためインタビューした。広島ではクラーク博士夫妻を宮島、厳島神社へ案内したが、神道に大変興味を持たれていた。

この講演のビデオ起こしは、当初O Tジャーナルの編集部で担当することになっていたのだが、数ヶ月して、手に負えないので私にして欲しいと依頼があり、私がすることになった。このテープ起こしによって、講演を英語で聞いているときは曖昧な理解であったことが非常に明瞭になり、クラーク博士は、大変論理的

に解りやすく作業科学とは何かを語っておられることが分かった。この講演内容とその前後に得た補足的知識を、対談形式に書き直してジャーナルに載せたのが、「作業的存在としての人間を研究する作業科学」(O Tジャーナル, 34 (12) 1157-1163,2000)である。このテープ起こしと原稿執筆によって、私の中で作業科学は非常に明瞭な概念となった。その本質は次の説明に尽きる。

つまり作業科学とは、「作業の形態 (form)、機能 (function)、意味 (meaning) を研究するものであること」、そして「作業科学は基礎社会科学領域の1つの学問であり、心理学が行動に、社会学が社会組織に、文化人類学が文化に焦点を当てるように、作業科学は作業に焦点をあてるものと位置づけられる、つまり、作業科学を、心理学、文化人類学、社会学、地理学と並ぶ基礎社会科学の一つに位置づけた」ということである。なお、その後この概念は多少変化し、現在では、基礎に留まらず、作業に関する研究であれば、基礎でも応用でも全て作業科学であるとされている。

このように作業科学を心理学や社会学と肩を並べるものとするという高い目標は、一見非現実的な話のようであるが、思えばどの学問もその黎明期には学問の領域として成立するかどうか危ぶまれていたわけであり、私が知っている範囲でも、「社会科学」という概念は以前にはなく、この言葉を唱え始めたのは18世紀の終わり頃に物理学者であったオーギュスト・コントであったということや、「心理学」は20世紀の初頭には、学問になるかどうかまゆつばものと考えられていたというようなことを心理学の時間に聞いたことを思い出すので、作業科学も優れた知識の集積によって万人が認める学問となり得ると考えられるのである。

私の作業科学に関する概念は先の対談を書いたことで安定し、どのような研究もこの枠組みですっきりと整理できるようになった (表1)。

表1 作業科学に関する概念

作業科学とは、「作業の形態 (form), 機能 (function), 意味 (meaning) を研究するものである」  
 作業科学は、「基礎社会科学領域の1つの学問であり、心理学が行動に、社会学が社会組織に、文化人類学が文化に焦点を当てるように、作業科学は作業に焦点をあてるものと位置づけられる」。作業科学は、「心理学, 文化人類学, 社会学, 地理学と並ぶ基礎科学であり、応用科学である」。  
 (Clark, F.A.<sup>1)</sup>)

### 作業療法の変遷と作業科学

作業科学が誕生するまでの流れを私の限られた知識を辿って振り返ってみると次のようになる。

1977年に発表されたKielhofnerとBurkeによる論文、「アメリカにおける作業療法の60年—その同一性と知識の変遷—」<sup>2, 3)</sup>が、全体の流れを理解する上で非常に解りやすい指針となる。これは1917年に米国に作業療法の全国組織が誕生してから60年間の歴史の流れをトーマス・クーンのパラダイムの概念に基づいて分析したものであるが、それによれば作業療法は、18～19世紀人道主義的考えの元、精神障害者に対する道徳療法として始まり、これが前パラダイム期とされる。1920～30年代は、段階づけた仕事と遊びを用いた作業パラダイムの時代であったが、作業パラダイムが科学的でないという批判を浴びるようになり、1940年代～50年代半ば頃まで様々な考えが競合するパラダイムの危機期となる。そして1950年代末から1960年代は、障害の評価と障害を減少するための治療法を主軸とする還元主義パラダイムの時代となり、次いで1970年代は、還元主義が障害治療のための新しい技術をもたらす一方で、OTの哲学的基盤を薄れさせアイデンティティや役割の混乱を生じ、特に慢性障害者の問題に取り組むには不適切であるといった批判がおこり、両者の考えが競合した危機期とされる。前述の歴史分析はここで終わるが、KielhofnerとBurkeは次に来たるべき新しいパラダイムは、一般システム理論を基礎知識とし、欠陥に焦点を当てるのではなくコンピテンシー (有能性) の発達を目指すもので、作業モデルと医学モデルを統合するものになるであろうと述べた。

還元主義パラダイムが隆盛を極めていた時期に、Kielhofnerの恩師である南カリフォルニア大学Reillyは、米国作業療法学会におけるエレノア・クラーク・

スレイグル記念講演 (1961年)<sup>4)</sup>で、還元主義パラダイムを既に批判しており、その後作業行動パラダイムを提唱した<sup>5)</sup>。

更にReillyは、米国作業療法士協会設立50周年に当たる1970年の学会で、作業療法の更なる発展のために作業療法の現代化を提唱し、その一つとして「作業療法は患者の適応を支援するための何らかの理論的枠組みを発展させること」、そのために、1) 臨床における蓄積された経験に関心を持ち、かつ、作業療法の基本的な価値と信念を顧みること、2) 新たな技能の適切性を評価し、作業療法へと統合すること、3) 限られた資源を最大限に利用するための方法を発展させるという3点を提案した<sup>6)</sup>。

1980年Kielhofner<sup>7, 8)</sup>は、作業行動の概念を実践モデル化した「人間作業モデル」を発表した。その概要は次の通りである。人間作業モデルは、作業行動という人間存在の一側面の説明を行うものである。作業行動とは、人間が目覚めている大部分の時間に従事する活動である。作業行動には、仕事、遊び、日常生活活動が含まれる。作業行動がどのように「動機づけられ、組み込まれ (生活の中に)、遂行されるか」を説明するために、人間システムが、「意志、習慣化、遂行」の3つのサブシステムからなる、という概念を提示する。その後様々な評価法が開発され、臨床実践で使えるものとなっている。

1982年、Rogers<sup>9)</sup>は、「医学と作業療法における秩序と非秩序」をAJOTに発表し、医学が目指すのは疾病の治癒であるのに対し、作業療法が目指すのは「作業遂行障害」の解決であることを明瞭に述べた<sup>6)</sup>。

そして1989年に南カリフォルニア大学Yerxa, Clarkらにより「作業科学」が作業研究の学問として提唱されたのであった<sup>1)</sup>。

更に、1997年には、カナダ作業療法士協会が「カナダ作業遂行モデル」<sup>10)</sup>を発表し、クライアントが重要視する作業遂行障害の解決に焦点を当てる、クライアント中心の作業療法の概念と評価法 (カナダ作業遂行測定) およびアプローチが示された。

近年注目されている作業療法界のもう一つのトピックは、1994年頃に始まるFisherによるAMPS (Assessment of motor and process skills) の紹介、講習会である。これは、作業科学的に見れば、非常に詳細な作業の形態的分析であり、その分析結果を用いてクライアントの全体的機能を判断するものであるとすることができる。

以上が私が理解する「作業科学」に関連する流れである。つまり作業科学は、道徳療法、作業パラダイム、作業行動、人間作業モデルという「作業」を核とする作業療法の変遷をレビューした後に、それら全てを包含する概念として考えられた学問ということである。「作業科学」を鳥瞰図として、作業に関する研究も理論も全てを位置づけることができると考えられる。

## 文 献

- 1) Florence A.Clark, 宮前珠子：作業的存在としての人間を研究する作業科学. OTジャーナル, 34 (12) 1157-1163,2000
- 2) Kielhofner,G. & Burke,J.:Occupational therapy after 60years. Amer J Occup ,31 (10) ,675-689,1977.  
(山田孝訳：アメリカにおける作業療法の60年. 作業行動と人間作業のモデル. 241-269)
- 3) 宮前珠子：我が国の作業療法の現状と今後の方向性—米国作業療法の変遷を参照しつつ—第1回広島県作業療法学会論文集. 特別講演録. 3-10,1966)
- 4) Reilly,M.:Occupational therapy can be one of the great ideas of 20th century medicine. Amer J Occup Ther,16,1-9,1962 (1961年エレノア・クラーク・スレイグル記念講演)
- 5) Miller,B.R.J., Sleg,K.W.,Ludwig,F.M. & et al (岩崎テル子監訳) :作業療法実践のための6つの理論. 協同医書出版. 1995
- 6) 山田孝：4-3作業行動理論と作業. 作業—その治療的応用. 106-122, 協同医書出版, 1975
- 7) Kielhofner,G. & Burke,J.:A model of human occupation. Part one. Amer J Occup ,34,572-581,1980
- 8) Kielhofnere (山田孝他訳) :人間作業モデル. 協同医書出版. 1990
- 9) Rogers,J.C.:Order and disorder in medicine and occupational therapy. Amer J Occup ,36 (1) ,29-35, 1982. (要約：宮前珠子：「医学モデル」と「作業モデル」—医学と作業療法における健康と障害の見方. 作業療法ジャーナル, 38 (3) ,231-233, 2004)
10. Canadian Association of Occupational Therapy : Enabling Occupation..CAOT Publications ACE, Ottawa,ON,1997 (訳書(吉川ひろみ監訳) :作業療法の視点. 大学教育出版. 2000)